

ルウェーのトムラ・システムズは、ペットボトルなど

の使用済み飲料容器の自動回収機

で、世界シェア70%を超えるトッ

プメーカーである。今日でこそ、

循環型経済的重要性が叫ばれてい

るが、ペッタ・プランケとトーレ・プランケの兄弟がノルウェー

で会社を設立したのは、いまから

50年前の1972年。同年にはオ

スロの食料品店に自社製の自動回

取機の1号機を設置している。そ

の後ボトル識別技術を確立し、北

欧のみならず米国にも進出してい

つた。85年に株式をオスロ証券取

引所に上場。

90年代には資源輸送会社を買収

し、容器の回収、集積、処理、リ

サイクルのバリューチェーン（価

値の連鎖）を作り上げていった。

2000年代になると、さらなる

展開のための技術を、企業買収に

よって手に入れていく。センサー

による分別技術、圧縮技術、鉱物

資源の選別技術、食品仕分け技術

などである。

第一の事業は回収機事業であ

る。使用済み飲料容器の回収機の

開発・製造、販売・リース、関連

サービスの提供などを行ってい

る。機械の開発・製造はノルウェー

で行い、一部はポーランド

で行う。資源の運搬はセンサー

による分別技術で行う。資源の選別

技術は、主にヨーロッパで行う。

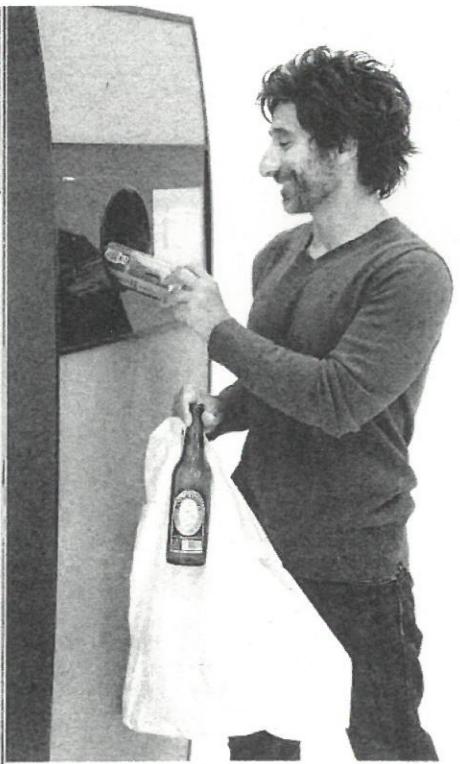
第二の事業はリサイクル事業であ

る。資源の選別技術を用いて資源を

回収する。資源の選別技術は、主に

ヨーロッパで行う。

使用済み飲料容器の自動回収機で、世界シェア70%超



Bloomberg

有利子負債増を抑制

売上高から製造原価、販売管理費、研究開発費などを差し引いた営業利益（本業のもづけ）も増加傾向にあり、売上高に対する営業利益の比率は10年以降10%台で比較的安定している。

研究開発費は売上高の4~5%相当、最先端のテクノロジー企業ではないことを考えると、低くはない水準だろう。

研究開発費は売上高の4~5%

ではないことを考えると、低くはない水準だろう。

研究開発費は売上高の4~5%

ではないことを考えると、低くはない水準だろう。

研究開発費は売上高の4~5%

ではないことを考えると、低くはない水準だろう。

研究開発費は売上高の4~5%

ではないことを考えると、低くはない水準だろう。

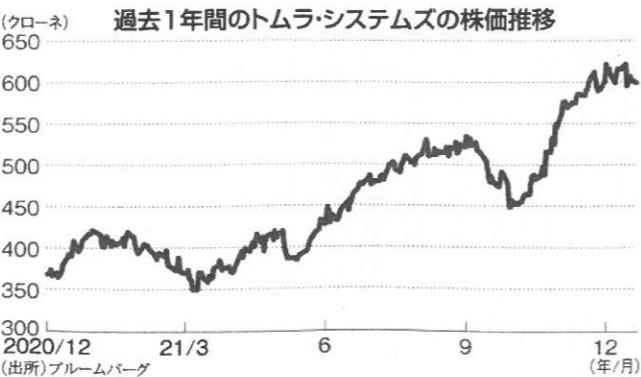
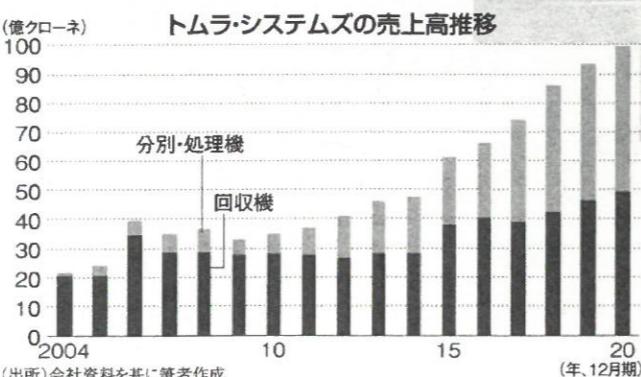
容器返却で現金戻り 日本はビール瓶で効果

トムラ・システムズの設立や成長の背景には、北欧や米国の一州で早くから開始されていたデポジット制度の存在がある。デポジット制度とは、預り金払戻制度。ボトル入り飲料を購入する時に少額の預かり金（デポジット）を店に支払い、空のボトルを返却すると預かり金が戻る仕組みである。

トムラ・システムズの売上高は2006年12月期に前年から64%増加した（図）。同年5月からドイツにおいて強制デポジットの対象が原則としてすべてのワンウェイ容器（使用後にその形状のまま再利用されない容器）に拡大された影響によるものだ。

日本で全国的なデポジット制度があるのはビール瓶である。販売時に保証金として1本5円が上乗せされるが、空き瓶を返却するとそれが戻ってくる。空き瓶の回収率は95%以上（ビール酒造組合調べ）、デポジット制度の効果がうかがえる。

（児玉万里子）



研究開発費は売上高の4~5%

ではないことを考えると、低くはない水準だろう。

研究開発費は売上高の4~5%

ではないことを考えると、低くはない水準だろう。

研究開発費は売上高の4~5%

ではないことを考えると、低くはない水準だろう。

のメーカーに製造を委託している。

同社の自動回

收機は、独・北

欧などの欧州お

よび北米を中心

に設置され、回

空き瓶など飲料

容器は年間40

0億本以上。こ

の部門が総売上

の約半分を占める。

第二は分別・処理機である。

カでも生鮮食品、加工食品の自動

選別機や食材の加工処理機（たと

えば、皮むき機）などの食品機械

の売上高が総売上高の約3割に達

する。ほかに、廃棄物や混合金属

の選別や回収をするリサイクル

事業、採掘作業の効率化を図る鉱

物資源の選別事業も手掛けてい

る。

のメー

カーに製

造を委託してい

る。

トムラの強みは、第一にリサイ

クル事業のシステム構築の経験を

欧米で重ねてきたこと。食料品店

の事業者、回収資源の運搬業者や

処理・販売先、自治体など、リサ

イクルに関わる先は広範に及ぶ。

そして、第二にセンサー技術・デ

ジタル技術を基にした分別技術を

磨いてきたことにある。

トムラの強みは、第一にリサイ

クル事業のシステム構築の経験を

欧米で重ねてきたこと。食料品店

の事業者、回収資源の運搬業者や

処理・販売先、自治体など、リサ

イクルに関わる先は広範に及ぶ。

そして、第二にセンサー技術・デ

ジタル技術を基にした分別技術を

リサイクル大手

企業データ

本社所在地	ノルウェー、アスケ
CEO	トーベ・アンダーセン(Tove Andersen)
時価総額	818億3000万クローネ
総資産	109億7680万クローネ
売上高	99億4130万クローネ
営業利益	13億20万クローネ
当期純利益	7億7510万クローネ
従業員数	4307人
上場取引所	オスロ証券取引所

(注)数字は2020年12月期、時価総額は同社ホームページより2022年1月10日現在

売上高が急増

リサイクル大手

トムラ・システムズ

売上高は07~12年は停滞し、小

幅な伸びが続いているため、15年以

降は拡大だ。

ノルウェー国内売上高は全体の

8%程度にとどまっているため、回

りはサービス提供などである。回

収から処理・再利用までを一貫し

て提供する事業戦略だ。

売上高が急増

トムラの強みは、第一にリサイ

クル事業のシステム構築の経験を

欧米で重ねてきたこと。食料品店

の事業者、回収資源の運搬業者や

処理・販売先、自治体など、リサ

イクルに関わる先は広範に及ぶ。

そして、第二にセンサー技術・デ

ジタル技術を基にした分別技術を

磨いてきたことにある。

トムラの強みは、第一にリサイ

クル事業のシステム構築の経験を

欧米で重ねてきたこと。食料品店

の事業者、回収資源の運搬業者や

処理・販売先、自治体など、リサ

イクルに関わる先は広範に及ぶ。

そして、第二にセンサー技術・デ

ジタル技術を基にした分別技術を

磨いてきたことにある。

トムラの強みは、第一にリサイ

クル事業のシステム構築の経験を

欧米で重ねてきたこと。食料品店

の事業者、回収資源の運搬業者や

処理・販売先、自治体など、リサ

イクルに関わ